

329  
197



挿入字  
是からの新書簡



始



特217  
387



これからの新書簡

手紙之友社編



序

手紙を書く事は、さのみむづかしいことではないが、何故か一般の人々に手紙は読む事は容易であるが、書くことは至難なものと解されて居るらしい。

何故手紙はさうまで読み易く、書き難いものなのだらう。

それは手紙の価値を知り其の様式を知らない爲であると思ふ。

手紙の価値は今更贅言を費すまでもないが、手紙が下手であれば、親しき友人間に隔てが出来たり、新しい友人を得る事が尠く、書いた手紙で笑はれたり、自分の今までの信用を失つたり、纏まる可き相談事が纏まらなると云ふ様に、日常生活上常に自分を不利な立場に置かなければならないものである。それに反し上手に手紙を書けば、對人信用を増し、常に自分を有利な立場に置く事が出来得るものである。

斯うした處世上密接な關係と重要な價值とが含まれてゐる事を知つて居る爲めに、手紙を書かうとする度に、手紙はむづかしいものであると感じるのである、そんな感じが先入主となつて自分の書く手紙に少し怖氣附いて居る上に手紙の様式が判然して居らぬ爲めに何うしても甘く、人を得心さし得る手紙が書けないのである、其の様式と云ふのは、そんなにむづかしいものであるかと云へば、實に驚くばかり易々たるもので、萬人が萬人持ち合して居るものである、たゞそれを活用するか、しないかに依つて、手紙の上手下手が決まるので其の間の呼吸は實に紙一枚の差である。

その呼吸をどうして會得するがよいかと云へばなるべく「數多く書く」事より以外に良策は無いのであるが、只無間矢鱈に數多く書けばとて上手になるものではない、どんな手紙に對しても出來得る限り眞面目に、手紙を書く、原因をよく呑み込んで、其の眞相を傳へる事が必要で、さうして數多く書くのが上手になる秘訣であり、紙一枚の差である呼吸

を會得する奥儀である。

けれども其の眞情を吐露し、眞相を知らせ衷情を披瀝するにも、それを言ひ現はすべき文字がある以上、何か参考になるべきものが無くては、本多作左の「おせん泣かすな、馬肥やせ」式のものとなつて、他人へ宛てる手紙としては、突飛過ぎる嫌がある。

時代には時代の流行語があり、禮儀がある以上、幾等簡單で明瞭なものがよいと云つてもあまり簡單に過ぎるのも禮を失する事となるものである。

本書は、新時代に添ふ禮式と流行語（通用語）に準じて、新時代の手紙の生きた文例を示し、青年諸君の机友として、諸君が處世上有利の立場を占めらるゝ幾分の貢獻とならんが爲め、著者が全力を傾注して努力編著したものである、幸ひ著者の努力が認められたならば、實に本懐とする處である。

昭和五年初春

多摩川の里にて

著者 殿

目次

1

年賀之部

作文上の注意……………(一)

年賀状……………(二)

一般の年賀状(口語)……………(三)

友人に(口語)……………(四)

長上に(候文)……………(五)

郷友に(口語)……………(六)

年賀状の返事……………(七)

(一)一般の場合(候文)……………(八)

(二)友人に(口語)……………(九)

---

祝賀之部

婚姻を祝ふ手紙(口語)……………(一〇)

其他作例(五)……………(一一)

同返事(候文)……………(一二)

其他作例(三)……………(一三)

出産を祝す(候文)……………(一四)

其他作例(六)……………(一五)

同返事……………(一六)

其他作例(三)……………(一七)

入學を祝す(口語)……………(一八)

其他作例(五)……………(一九)

卒業を賀す(候文)……………(二〇)

同(口語)……………(二一)

- 其他作例(五).....(一九)
- 同 返 事(口語).....(一九)
- 其他作例(一).....(二〇)
- 入營を祝す(候文).....(二〇)
- 同 (口語).....(二〇)
- 其他作例(五).....(二一)
- 同 返 事(候文).....(二一)
- 同 (口語).....(二一)
- 其他作例(三).....(二二)
- 病氣全快(一般の場合)(候文).....(二二)
- を賀す (友人に)(口語).....(二二)
- 同 其他作例(四).....(二二)
- 同 返 事(候文).....(二二)
- 同 (口語).....(二二)

報知之部

- 其他作例(二).....(三)
- 豊年を賀す.....(三)
- 其他作例(三).....(三)
- 就職を賀す(候文).....(三)
- 其他作例(二).....(三)
- 同 返 事(候文).....(三)
- 其他作例(四).....(三)
- 作文上の注意.....(三)
- 入學の通知(候文).....(三)
- 其他作例(二).....(三)
- 出産通知(候文).....(三)
- 其他作例(三).....(三)

- 甲種合格の通知(口語).....(四〇)
- 入營を報する手紙(候文).....(四〇)
- 其他作例(五).....(四〇)
- 死去の通知(候文).....(四一)
- 其他作例(四).....(四一)
- 妻を迎へた通知.....(四一)
- 其他作例(二).....(四一)
- 歸省を報す(其の一)(口語).....(四一)
- 同 (其の二).....(四一)
- 其他作例(四).....(四一)
- 病氣を知らす手紙(候文).....(四一)
- 其他作例(四).....(四一)
- 無事歸郷を報す(其の一)(口語).....(四一)
- 同 (其の二)(候文).....(四一)

- 其他作例(二).....(五二)
- 安着を報す(候文).....(五二)
- 其他作例(四).....(五二)
- 改名通知(候文).....(五二)
- 轉勤通知(候文).....(五二)
- 社名變更の通知(候文).....(五二)
- 其他作例(三).....(五二)
- 農況を都會の友に知らす(口語).....(五二)
- 其他作例(四).....(五二)
- 病氣全快を報する手紙(候文).....(五二)
- 其他作例(二).....(五二)
- 神田祭りの復興を知らす(口語).....(五二)
- 艦内生活を報する手紙(候文).....(五二)
- 夜學會の開會を報す(候文).....(五二)

同返事……………(七)

招誘之部

作文上の注意……………(六)

新年宴會に友を招く(候文)……………(七〇)

其他作例(三)……………(七一)

かるた會に招く(口語)……………(七二)

其他作例(三)……………(七三)

梅見に誘ふ(口語)……………(七四)

其他作例(三)……………(七五)

花見に誘ふ(口語)……………(七六)

其他作例(三)……………(七七)

納涼に招く(候文)……………(七八)

其他作例(二)……………(七九)

夕涼みに友を招く(口語)……………(七)

其他作例(三)……………(七)

祭禮に招く(候文)……………(八〇)

其他作例(二)……………(八一)

誕生日に招く文(候文)……………(八二)

其他作例(一)……………(八三)

七夜に人を招く(候文)……………(八四)

壽宴に招く(候文)……………(八五)

其他作例(三)……………(八六)

結婚披露に招く(口語)……………(八七)

其他作例(四)……………(八八)

佛事に人を招く(候文)……………(八九)

其他作例(三)……………(九〇)

熱海温泉に一日(口語)……………(九一)

の行樂を誘ふ……………(九二)

見舞之部

春の遠足に誘ふ(口語)……………(八)

其他作例(三)……………(九)

月夜に人を誘ふ(口語)……………(一〇)

夜學會に加入を勧誘す(口語)……………(一一)

作文上の注意……………(九四)

寒中見舞の文(口語)……………(九六)

其他作例(五)……………(九六)

同返事……………(九八)

其他作例(三)……………(九九)

餘寒見舞……………(一〇〇)

其他作例(三)……………(一〇一)

暑中見舞の手紙(口語)……………(一〇二)

其他作例(五)……………(一〇三)

同返事(候文)……………(一〇四)

其他作例(三)……………(一〇五)

洪水見舞……………(一〇六)

其他作例(二)……………(一〇七)

同返事(候文)……………(一〇八)

火事見舞(口語)……………(一〇九)

其他作例(一)……………(一一〇)

類焼を見舞ふ(候文)……………(一一一)

其他作例(二)……………(一一二)

怪我見舞(口語)……………(一一三)

其他作例(一)……………(一一四)

同返事(口語)……………(一一五)

其他作例(一)……………(一一六)

- 病氣見舞(候文).....(一三五)
- 其他作列(八).....(一三六)
- 同返事(口語).....(一三三)
- 其他作例(六).....(一三三)

### 弔慰之部

- 作文上の注意.....(一三五)
- 死を弔す(口語).....(一三六)
- 其他作例(六).....(一三七)
- 同返事.....(一三三)
- 其他作例(三).....(一三四)
- 失意の友を慰む(口語).....(一三五)
- 落第せる友を慰む(口語).....(一三六)
- 失戀の友を慰む(口語).....(一三六)

- 病友を慰む(一)(候文).....(一三九)
- 病友を慰む(二)(口語).....(一四〇)

### 註文及催促之部

- 作文上の注意.....(一四二)
- 書籍の註文(候文).....(一四三)
- 其他作例(二).....(一四四)
- 同返事(候文).....(一四四)
- 其他作例(二).....(一四四)
- 農具の註文(候文).....(一四五)
- 改良養蠶網の註文.....(一四五)
- 貸金の催促(候文).....(一四六)
- 其他作例(二).....(一四六)
- 同返事(候文).....(一四七)

- 其他作例(二).....(一五〇)
- 家賃の催促(口語).....(一五一)
- 其他作例(一).....(一五二)
- 頼母子講設立の催促(口語).....(一五三)
- 註文品の催促(口語).....(一五四)
- 送金の催促(口語).....(一五五)
- 旅館への註文(口語).....(一五五)
- 村政刷新會に出席を促す(口語).....(一五六)
- 其他作例(三).....(一五七)
- 同返事(口語).....(一五六)
- 其他作例(一).....(一五九)

### 依頼之部

- 作文上の注意.....(一五九)
- 小店員の雇傭を頼む(口語).....(一六一)
- 其他作例(二).....(一六二)
- 小店員の傭入を依頼す(口語).....(一六三)
- 其他作例(二).....(一六四)
- 就職を依頼す(候文).....(一六九)
- 其他作例(二).....(一六九)
- 下婢の周旋を依頼す(口語).....(一七一)
- 其他作例(一).....(一七三)
- 同返事(口語).....(一七四)
- 其他作例(二).....(一七五)
- 應接の依頼(口語).....(一七六)
- 種物送附を依頼す(口語).....(一七八)
- 同返事(口語).....(一七八)



- 都の友に買物を頼む(口語)……………(一九九)
- 其他作例(二)……………(二〇〇)
- 同 返 事(口語)……………(二〇一)
- 其他作例(二)……………(二〇二)
- 金子借用を依頼す(口語)……………(二〇三)
- 其他作例(二)……………(二〇四)
- 同 返 事(口語)……………(二〇五)
- 其他作例(二)……………(二〇六)
- 開業披露文の代作を願ふ(口語)……………(二〇七)
- 歸省の友に傳言を依頼す(口語)……………(二〇八)
- 書物の借用を願ふ(口語)……………(二〇九)
- 其他作例……………(二一〇)
- 職人を依頼す(口語)……………(二一一)
- 其他作例(二)……………(二一二)

- 農事の手傳を願ふ(口語)……………(一九五)
- 其他作例(二)……………(一九六)
- 送金を依頼す……………(一九七)
- 其他作例(候文)……………(一九八)
- 禮狀を出して貰(口語)……………(一九九)

問 合 せ 之 部

- 作文上の注意……………(二〇一)
- 物價の問合せ(候文)……………(二〇二)
- 其他作例(二)……………(二〇三)
- 就職希望者の身元問合せ……………(二〇四)
- 同 返 事(口語)……………(二〇五)
- 其他作例(一)……………(二〇六)
- 遺失物を問合せ(候文)……………(二〇七)

- 其他作例(一)……………(二〇八)
- 來訪者の都合を問合せ(候文)……………(二〇九)
- 東京遊學に就きて問合せ(口語)……………(二一〇)
- 其他作例(二)……………(二一一)
- 同 返 事(口語)……………(二一二)
- 其他作例(二)……………(二一三)
- 住所を問合せ(口語)……………(二一四)
- 其他作例(二)……………(二一五)
- 面會の日時を問合せ……………(二一六)
- 其他作例(三)……………(二一七)
- 同 返 事(候文)……………(二一八)
- 其他作例(二)……………(二一九)
- 苦學の状態を問はれしに答ふ……………(二二〇)

贈 呈 之 部

- 作文上の注意……………(二二一)
- 名産物を贈くる(口語)……………(二二二)
- 其他作例(四)(口語)……………(二二三)
- 同 返 事(口語)……………(二二四)
- 寫眞を送くる(口語)……………(二二五)
- 雛に添へて送らる(候文)……………(二二六)
- 菊花を贈くる(口語)……………(二二七)
- 都會より田舎へ物品を贈る(候文)……………(二二八)
- 祭禮の供物を送くる(口語)……………(二二九)
- 其他作例(一)……………(二三〇)
- 梅の花に添へて(候文)……………(二三一)
- 其他作例(一)……………(二三二)

謝 禮 及 謝 罪 之 部

作文上の注意 …………… (二四四)

會葬の禮 (口語)…………… (二四七)

饗應になりし禮 (口語)…………… (二四七)

其他作例 (二)…………… (二四八)

賁物の禮 (口語)…………… (二四七)

其他作例 …………… (二四八)

來訪を謝す (口語)…………… (二四九)

其他作例 …………… (二四九)

送別會に招かれたる禮 (候文)…………… (二五〇)

其他作例 …………… (二五一)

盡力を受けし御禮 (口語)…………… (二五二)

其他作例 …………… (二五三)

金員返却の禮 (候文)…………… (二五三)

其他作例 …………… (二五三)

借用品を返す禮 (口語)…………… (二五九)

其他作例 …………… (二五九)

約束を破つた謝罪 (口語)…………… (二六一)

其他作例 …………… (二六一)

借用品の汚損を謝す (口語)…………… (二六四)

其他作例 …………… (二六四)

諭告之部

作文上の注意 …………… (二六六)

退學せんとする弟を戒む (口語)…………… (二六八)

弟の不平を戒む (口語)…………… (二七一)

朋友の我儘を忠告す (口語)…………… (二七二)

筆不性の友を戒む (口語)…………… (二七〇)

裏切りたる知人を戒む (口語)…………… (二七二)

雜文之部

療養先きの妻 (口語)…………… (二八四)

作文上の注意 …………… (二八六)

訪問日を豫告す (口語)…………… (二八九)

恩師の許に送くる (候文)…………… (二九〇)

要件を兼ね旅情を知らす (候文)…………… (二九一)

久し振りにて父母に (候文)…………… (二九二)

繪葉書文 (一) (口語)…………… (二九四)

同 (二) (口語)…………… (二九五)

木曾路より (口語)…………… (二九六)

旅にある従弟へ (口語)…………… (二九六)

雪の山家より (候文)…………… (二九七)

歸省して都の友に (口語)…………… (二九九)

はがき之部

歌留多會に招く (口語)…………… (三〇〇)

寒中見舞 (同)…………… (三〇〇)

初夏通信 (口語)…………… (三〇一)

同 (二) (同)…………… (三〇一)

梅雨見舞 (同)…………… (三〇一)

梅雨の都會より (同)…………… (三〇一)

秋になつて (同)…………… (三〇一)

雪の田舎より (同)…………… (三〇一)

留守見舞 (同)…………… (三〇二)

病氣見舞 (同)…………… (三〇二)

同返事 (同)…………… (三〇二)

火事見舞(同) ..... (三〇七)

水害見舞(同) ..... (三〇八)

海村の避暑に(同) ..... (三〇九)

觀月に(同) ..... (三〇九)

音樂會に誘ふ(口語) ..... (三〇九)

旅行先に報ず(同) ..... (三〇九)

轉居の通知(同) ..... (三〇九)

歸宅を報ず(同) ..... (三〇九)

講演會に招く(同) ..... (三〇九)

在宅を頼む(同) ..... (三〇九)

出産の通知(一)(同) ..... (三〇九)

同 (二)(同) ..... (三〇九)

同 返事(同) ..... (三一一)

同 (二)(同) ..... (三一一)

死去通知文に就て ..... (三一一)

目次(終)

目次

年賀の書方(第一) ..... 一

都の友に春況を ..... 四

彼岸贈物をそへて ..... 六

全返事 ..... 七

櫻況を友に ..... 八

花信を吉野より ..... 一〇

櫻の夜に友を ..... 一二

消息たえし友に ..... 一三

新茶をおくる ..... 一五

端午の贈物をそへて ..... 一六

トマトを贈る	二七
初夏の印象を	二八
暑中見舞	三〇
海水浴に誘ふ	三二
アルプス登山者より	三三
大洗海岸より	三四
片山里の夏を	三五
親友の許に	三七
暴風見舞	三九
茸狩に誘ふ	四〇
運動競技選手に	四一
院展入選を祝ひて	四二
紅葉観に	四三
秋終る日北國の友に	四四

クリスマスに招く	三六
寒中見舞	三七
歳末に	四〇
雪の都の姉に	四一
さむき兵營より	四四
婚禮祝賀	四七
新婚旅行先から	四九
出産を通知	四九
死去通知	五〇
招待状(第一)	五一
同窓會案内状(第二)	五二
通知状	五三
結婚式に招く	五四
悔み状	五五

火災見舞	見舞	春の散歩	雪の妙高へ	鹿野山から	金談を断る	同窓會通知	轉居報知	上京報知	稲作報導	年賀状	和歌	友人に	貸金催促
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
大	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	九	九

病氣見舞	祭禮	追悼の句に添へて	旅舎問合せ	貸家問合せ	縁談問合せ	會社員を紹介	友人を紹介	柿の禮	寫眞をおくる	送呈目錄	虫籠にそへて	書籍を贈る	花奔を贈る
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
七	七	七	七	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六

掛金	催	促	九七
書物	催	促	九八
手傳ひ	依	頼	一〇一
寫字	依	頼	一〇二
女中	依	頼	一〇三
友人	紹	介	一〇四
人を	紹	介	一〇五
晩餐	招	待	一〇七
招待	招	待	一〇八
婚禮	招	待	一〇九
開業	祝		一一〇
出産	祝	ふ	一一一
新築	祝	ふ	一一三
病氣	見	舞	一一四

暴風	見	舞	一一五
病人への	手紙		一一七
洋行する	人に		一二九
病死者の	靈前に		一三二
弔詞			一三四
弟の	人選を喜んで		一三五
祝詞	をうけて		一三六
世話	になりて		一三八
病中	妹へ		一三〇
旅に	出て		一三四
竹藪	ミ茶畑	ミ	一三五
罪の	なげき	外數点	一三七
送金	通知		一四〇

(目次をばり)

謹んで新年を祝福いたし候

謹賀新年

賀正

新正を賀し申し候

新しんととりりままして誠まことにおおめめが  
たたううごごややいいままままししてていいのの年としははおお互たがひにに  
幸か福ふいいああるるこことと祈いのちりりまましして

新しんののししとと仰おほめめめががたたくく中ちゆう納ないい  
仰おほ尊とん家かのの仰おほ一いつ統とう様さま仰おほ招まね集あつままをを  
祝いわ福ふ中ちゆうににおお小こ



都<sup>みやこ</sup>の友に春況を  
 家を<sup>いえ</sup>をわねばる<sup>わねばる</sup> 柱<sup>すゐ</sup>の生<sup>い</sup>植<sup>げ</sup>一<sup>いつ</sup>雨<sup>あめ</sup>とに縁<sup>えん</sup>を  
 寺<sup>てら</sup>前<sup>まへ</sup>を流<sup>なが</sup>る<sup>る</sup> 川<sup>かわ</sup>瀬<sup>せ</sup>に春<sup>はる</sup>の色<sup>いろ</sup>を加<sup>くわ</sup>へ  
 て小<sup>こ</sup> 黄<sup>なほ</sup>代<sup>しろ</sup>の因<sup>い</sup>ごと<sup>と</sup>に伸<sup>の</sup>び小<sup>こ</sup>雨<sup>あめ</sup>を望<sup>のぞ</sup>  
 して女<sup>むすめ</sup>の早<sup>はや</sup>着<sup>ぎ</sup>を時<sup>とき</sup>に近<sup>ま</sup>づき<sup>ま</sup>て小<sup>こ</sup>雨<sup>あめ</sup>

来<sup>き</sup>夕<sup>ゆふ</sup>の若<sup>わか</sup>葉<sup>は</sup>よ風<sup>かぜ</sup>こよぎ小<sup>こ</sup>雨<sup>あめ</sup>は恋<sup>こひ</sup>  
 恥<sup>は</sup>づふ子<sup>こ</sup>の神<sup>かみ</sup>に似<sup>に</sup>通<sup>とお</sup>ひて小<sup>こ</sup>  
 茶<sup>ちや</sup>もややく若<sup>わか</sup>葉<sup>は</sup>を雁<sup>かり</sup>へ 今<sup>いま</sup>は雨<sup>あめ</sup>花<sup>はな</sup>  
 の飲<sup>うた</sup>めみに小<sup>こ</sup>雨<sup>あめ</sup>やがし里<sup>さと</sup>の茶<sup>ちや</sup>つ  
 へ飲<sup>うた</sup>めかすえも近<sup>ま</sup>づき<sup>ま</sup>て小<sup>こ</sup>

彼岸贈物をそへて

彼岸贈物よりきて

今日はお彼岸と母が暮参りし浦守と

妹兩人やふがら戦場より如き騒ぎより

出来せもの牡丹餅とは名許り騒ぎ

の割合より作ふし不良は彼女達より書か

免より南親きに任せ少々お目かけ  
あーい

返事

御令妹方御丹精の馳走有り難く頂

戴いりしお手際は母より御書

全返事

で無く感心かみんして来た。早速さつそく御前ごぜんに  
供ともくお下くだりと貴き歡くわんして来た。先まは印  
礼らいまで

櫻況を友に

君！都みやこは桜さくらを盛もいで花時はなときから

では見みられぬ景趣けいすい下くだり永ながくは不景ふけい  
気きもどろく退散たいさんしてやう見みえけら  
水みづ矢張やはり花時はなときは人ひとの思し慮りょがすうかり  
浮うき水みづ気味きみと見みえまき 全封花十題ぜんふうはなじゅうだい 玲れい  
りくは有りませんがお贈り致いたした。

花信 (吉野より)

何んとして行くと、花は吉野からね。六月の夜  
 ころのぼつて行く、室に満月、花は吉野、蔵王  
 主、吉水神、はるばる、所々、千々、境、山、大、  
 僅は、吉野、飛鳥山、早、花と考へて居た、千々、  
 立、作、ゆ、に、美、術、的、の、金、山、の、花、年、之、百、が、部  
 いて、居、る、の、で、あ、る。

小はく、と、ぼ、つ、り、花、の、吉、野、山

小が、最も、花の、吉野と、叙述  
 した、名、だ、と、つ、て、感、ず、  
 だ、と、い、ふ、に、不、満、な、感、を、花、の、や、う  
 に、紅、霞、の、色、を、い、ふ、は、あ、ら、ま、り、  
 する。實際、優、雅、な、花、の、  
 姿、の、地、も、あ、ら、ま、り、知、る、と、い、ふ、  
 松、葉、ま、は、り、は、別、色、を、所、感、ず、  
 あり、と、い、ふ。



桜の夜に友を  
 別れは さらけ けしき  
 来更に さらけ けしき  
 り 中越 さらけ けしき  
 中越 さらけ けしき

消息たえし友に

春の 草 早く 覚め 中一、を 惜し とは 美  
 思 召さす や 五月 雨の 系 軒 近く あり 続  
 り 昨 白 今日 君 寂し とは 思 召さす や  
 庭の 桐の 葉の 花に ぼれ、 窓 遠く 青 系が

消息たえし友に

山に杜鵑名のりてや

家をとる籬のり花雪の如くこぼれ

知と遊び竹藪には筍白々一犬をまじ

て小虫もホッホッ見之初むるなご免に

角由金々物夏は宵一く小

新茶をおくる

自製茶少くあらざ

一とけま、唯ん味、くんと

如、何とせん、ま、て、仰、取

一一くせん、ま、て

新茶をおくる

端午の贈物にそへて

暖気いやはましく深くあましく  
きけんしゆくひらきられぬ  
看印 虫気もあけられぬ  
印 継のよ印 成長遊ばされぬ  
何はかり印 結のよふはか  
存印のよて所々よりあま  
へまるとは見替くはか  
一のち 糸織も陽とあど印

トマトと贈る

トマト  
きけんしゆくひらきられぬ  
看印 虫気もあけられぬ  
印 継のよ印 成長遊ばされぬ  
何はかり印 結のよふはか  
存印のよて所々よりあま  
へまるとは見替くはか  
一のち 糸織も陽とあど印

初夏の印象

都の鐘は、初夏の印象を  
 知らせる。もう初夏は、  
 私には故郷の初夏の印象と  
 似て居る。おきく、おきく、  
 静寂、私は到底、  
 かみぐる。おきく、おきく、  
 秋の草が、おきく、  
 かみぐる。おきく、おきく、

初夏の印象を

道は、花は、風は、涼しい。  
 初夏の印象を、  
 懐故郷の印象、  
 自然の印象、  
 ておりました。

都の印象



暑中見舞

本日は大分暑いではありませんか。田舎  
下へ帰らぬ程でよから都の暮は如  
何計りかと仰々して居ます。差次あつて  
過一歩も探祈り居ります。

海水浴に誘ふ

守真と平民的と海水浴と云ふ計画は下  
少く遠く安房の海岸を選定してま  
全行は君とよ君、勿論漁家自祈であ  
賛成して下さる。

あつたし海へ  
のりし二週  
はあつたし  
とほりまた  
いふやいふ



アルプス登山者より

今日よく槍ヶ岳山林麓に寺を出発し  
山岳征服の歩を地に印しつた。一行至  
て健全、重畳山路を登つて行きます  
もう通信も出来ない地域です。樹草。

大洗海岸より

看地喫烟と云ふのを見ず、詩的では不  
以男性的作業下で、僕も漁民と交つて  
曳と見す。群衆的、景気よ、と云ふ  
やがて磯に生きた魚の山と云ふ事だ。

片山里の夏を

豆腐の食べられぬ里、郵便屋さん外は  
洋服と見ふ、里、餘りやびいすぎて勉強は  
出来ません、ま、畫より多と蝉の音が、ま、  
眠水た似、人外境、小里、三軒屋は実

先よりありき、水から黄昏、夜とあるとき  
寂し美しきと感どきも、君おどろけは、  
けません、夜はランプです、さう、  
帰るつもりで、はやりませんか、  
唯、食物だけ、  
閉じて、

秋友の許に

すうかり秋らしくありき、雨、天は高く、野は  
広。梢には鳥がうたひ、馬はくらやに肥え、  
何んと云ふ静寂であらう。清の葉と返る秋  
風は、気持ちよく、あ、自然は公平である、夏の

次に秋がまけうて、雨多めでいね。おからは  
よく、我々も時どき、お島も、紫高の男  
の傍を、舞揮い、やうに、はる、か。移る、秋が  
やつと、来、い、つ、です。

都も、さ、ぶ、若、や、い、き、く、お、は、せ。

暴風見舞

昨日は物凄、風で、高台の貴家の程  
へも、と、お、存、い、障、り、あ、き、や、な、や、案、じ、ら、れ  
ま、たり、で、御、伺、い、致、し、ま、せ、尚、当、方、は、板  
塀、破、損、し、た、丈、に、無、事、で、し、た。

茸狩に誘ふ

君 明<sup>あきら</sup>と明<sup>あきら</sup>の休<sup>やすみ</sup>暇<sup>ひま</sup>を利用して茸<sup>たけのこ</sup>狩<sup>がかり</sup>  
 をやうとするが、場所<sup>ところ</sup>は山<sup>やま</sup>田<sup>た</sup>君<sup>きみ</sup>が案内<sup>あんない</sup>  
 するとよいのです。ベースヤボート以外<sup>いふが</sup>にやうな  
 興<sup>きょう</sup>味<sup>み</sup>が<sup>あ</sup>ると思<sup>おも</sup>います。翫<sup>あそ</sup>成<sup>せい</sup>一<sup>いつ</sup>給<sup>たま</sup>へ

運動競技選手に

君<sup>きみ</sup>の名<sup>な</sup>と新<sup>しん</sup>聞<sup>ぶん</sup>紙<sup>し</sup>で抱<sup>かか</sup>いて非<sup>ひ</sup>常<sup>じょう</sup>に愉<sup>たの</sup>快<sup>しい</sup>  
 を感<sup>かん</sup>じます。神<sup>しん</sup>宮<sup>みや</sup>競<sup>きやう</sup>技<sup>ぎ</sup>は運<sup>うん</sup>動<sup>どう</sup>界<sup>かい</sup>に時<sup>とき</sup>  
 勢<sup>せい</sup>を盛<sup>も</sup>ります。明<sup>あきら</sup>の五<sup>ご</sup>百<sup>ひゃく</sup>米<sup>まい</sup>徒<sup>た</sup>歩<sup>ぽ</sup>競<sup>きやう</sup>技<sup>ぎ</sup>に栄<sup>えい</sup>冠<sup>かん</sup>  
 を擔<sup>かか</sup>うは、標<sup>めい</sup>中<sup>ちゆう</sup>心<sup>しん</sup>からと希<sup>き</sup>望<sup>ぼう</sup>をします。

院展入選を祝ひて

秋の美術殿堂院展へ入選された君の  
作品一瞥へる女一に敬意を表します  
血と涙の研鑽五年。かくて報へられた君の  
努力に対して祝辞を申しあげらる。

紅葉観に

碓氷の紅葉が素敵によつときまゝた。汽車で  
軽井沢へ降り徒歩四里紅葉見ながらの碓氷  
越えや。いふ趣向です。奮々御賛成  
致したく會員人全々よりや

秋終る日北玉之友よ

コノモスハもて、残りふく暮らまじく。夕白の明ら、  
庭には鶏の羽を散りて探しておまじ。こゝろ  
をふふ、秋の枝よ赤い実がまじつ生けし居まじ  
は、もよければ音もふい。  
ありあけの物かた、あつらひと静まりて人づ  
ゆるあけふと、秋！ 冬平はからは赤い潮風  
かえよ、とたいてまじつて来る。  
静る夕日は平らに、何人落ちやうとま

北玉之友よ

静る夕日でも。僕はおはまのまじつて、  
おまじ。海を渡る人さしと、  
る魚舟にこゝろ、こゝろ、五つ。自らのまじく  
と、おまじつておまじ。  
さほれ、おまじの煙は消えぬく山に、おまじの  
おまじ、おまじの秋はまじ。おまじ、人おまじの  
おまじ、おまじのまじ。

南玉之友よ



クリスマスに招く

明日のクリスマスは午後六時から拙宅で祈禱  
式と宮み式后カードと交換飾物の介與といた  
しかあつて福音師宮島先生の御講話を  
願ひ樂しまつる過したつと存じますか

年に三度の神聖な集ひですから御繰  
合せの上是非御来会下さいますやう御待  
ち申して居ります

寒中見舞

大寒に入りました御地はまた寒さの刻

所だと承つて居ります御老体如何か  
暮しのよかと只官御事申して  
居りますこちらは冬に入つてから雪も降  
りませす殆ど毎日のやうに風が吹く深夜軍  
朝寒冷骨に徹る許りです

何か御身体御大切にお守りませお送りし  
た卵は私飼育の鶏が産んだもので寒  
卵として特別賞美いたりますので一々相お  
送りいたりました。お納めが致しなは本懐の  
至に存じます。

歳末に

歳末に

本年もおつまつて餘日少なに相成りま  
た。何かかやと御多忙之事と存じます  
別包歳暮送るおとし鹿瓜らういの  
ではありませぬが御受納下さ、

雪の都の姉に

姉様、

雪の都の姉に  
おつまつて御多忙之事と存じます  
別包歳暮送るおとし鹿瓜らういの  
ではありませぬが御受納下さ、

雪の都の姉に

まもなく雪が  
 満ち自白體の一語をほろしほがりの雪の野をゆく  
 けつ白く新雪のわらわら景、静かにほろしほとくわらわら  
 りやうを色しとほらまた。  
 夜一雷の積り、夜洋燈一つでランパ一フドラチ  
 をめけし一ふ主人、奥の八畳の台では火き、ふ  
 火鉢よどろり、火とくべしお父様か身を  
 お手に我と此お母さんけ系車とブク、婢  
 て、いりりや、また、蹠は根のるりし、勉強一と

おまへにお米もお少も念ふよ、お用おあされてね  
 る。姉之様、田園生活の元来、雪の夜はだ  
 んく、ま更けし、遠く火の音が返りて、おし、ア  
 え、おのし、雪折れ、おのし、おのし、おのし、おのし、  
 く、おのし、おのし、おのし、おのし、おのし、おのし、  
 ま、おのし、おのし、おのし、おのし、おのし、おのし、

おのし、おのし、おのし、おのし、おのし、おのし、

おのし、おのし、おのし、おのし、おのし、おのし、

雪の都の姉に

文々、紅堂より

木柵の外では吹き、あれてくる。だる、窓のガラス  
がガッく、く、居る。煙草の火、建物は、ゆけ  
を、おぼれ、一月は、今、暖爐、を、か、こんで、ま、く、れ  
清、は、餘、を、か、ま、い、い、  
清、は、主、題、は、×、一、等、卒、故、郷、の、狐、捕、と、話、を、く  
甘、い、ま、し、し、一、時、を、ば、か、り、無、種、の、先、不、話、か、つ、ま、し、  
に、あ、ま、し、と、就、褥、の、ワ、バ、が、寝、ま、し、と、暗、不、を、ま、ま、や、ふ、  
葉

清、で、吹、奏、を、れ、る、一、月、は、言、ひ、合、々、と、標、を、寝、ま、し、  
人、と、あ、る、毛、布、二、枚、よ、白、い、布、圍、は、り、た、て、は、カ、ク、  
ふ、り、人、を、睡、ま、し、い、  
一、不、同、故、郷、の、こ、が、あ、い、清、が、  
一、あ、が、炬、燵、を、か、ま、ん、で、今、頃、自、分、の、鼻、と、く、居、ま、し、  
あ、い、く、ま、  
こ、の、ゆ、り、と、ま、ま、り、ぬ、ほ、と、寝、の、情、が、ム、ラ、く、  
と、清、を、ま、し、し、た、ま、り、ふ、く、の、で、す、  
故、郷、母、在、寒、月、影

眼<sup>め</sup>もろくは<sup>こ</sup>嶺<sup>さん</sup>と<sup>ふ</sup>風<sup>かぜ</sup>です、<sup>け</sup>け<sup>り</sup>と<sup>あ</sup>言<sup>い</sup>で  
も<sup>い</sup>び<sup>き</sup>の<sup>こ</sup>声<sup>こゑ</sup>が<sup>き</sup>こ<sup>え</sup>る。寝<sup>ね</sup>室<sup>むろ</sup>は<sup>い</sup>裁<sup>き</sup>と<sup>し</sup>て<sup>い</sup>ま<sup>ふ</sup>  
か<sup>く</sup>く<sup>く</sup>兵<sup>へい</sup>營<sup>えい</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>や</sup>の<sup>よ</sup>夜<sup>よ</sup>は<sup>あ</sup>け<sup>て</sup>申<sup>ま</sup>さ<sup>ま</sup>す  
さ<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>  
この<sup>よ</sup>夜<sup>よ</sup>は<sup>い</sup>日<sup>ひ</sup>儀<sup>ぎ</sup>に<sup>あ</sup>り<sup>ま</sup>す<sup>と</sup>別<sup>べつ</sup>社<sup>しゃ</sup>を<sup>い</sup>ま<sup>し</sup>て<sup>い</sup>ま<sup>す</sup>  
物<sup>もの</sup>語<sup>ご</sup>、<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>

望<sup>ぞう</sup>舎<sup>しゃ</sup>より  
支<sup>し</sup>り

矢<sup>や</sup>敷<sup>しき</sup>

婚禮祝賀

此<sup>こゝ</sup>の<sup>よ</sup>夜<sup>よ</sup>は<sup>い</sup>日<sup>ひ</sup>儀<sup>ぎ</sup>に<sup>あ</sup>り<sup>ま</sup>す<sup>と</sup>別<sup>べつ</sup>社<sup>しゃ</sup>を<sup>い</sup>ま<sup>し</sup>て<sup>い</sup>ま<sup>す</sup>  
物<sup>もの</sup>語<sup>ご</sup>、<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>  
さ<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>  
この<sup>よ</sup>夜<sup>よ</sup>は<sup>い</sup>日<sup>ひ</sup>儀<sup>ぎ</sup>に<sup>あ</sup>り<sup>ま</sup>す<sup>と</sup>別<sup>べつ</sup>社<sup>しゃ</sup>を<sup>い</sup>ま<sup>し</sup>て<sup>い</sup>ま<sup>す</sup>  
物<sup>もの</sup>語<sup>ご</sup>、<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>

新婚旅行先から

昨日はあやしく眠るまで汗見送りしき水感  
縮玉極に存小お蔭様よし滞りあつて夜せ  
過一小時汗安心下さ水度小

本日は蘆の湖畔を散策し汗を

出産と通知

昨日午後五時女子を生まる  
人とも至つておやうたじ  
一子女を産びし水あり小根  
いそぎで通知が中より小

死亡通知

長女<sup>ちやうむすめ</sup>氏<sup>うぢ</sup>と<sup>と</sup>風<sup>ふう</sup>邪<sup>じゃ</sup>と<sup>と</sup>急<sup>きゆう</sup>性<sup>せい</sup>病<sup>びやう</sup>  
<sup>て</sup>山<sup>やま</sup>中<sup>なか</sup>村<sup>むら</sup>に<sup>に</sup>て<sup>て</sup>急<sup>きゆう</sup>性<sup>せい</sup>病<sup>びやう</sup>に<sup>に</sup>て<sup>て</sup>死<sup>し</sup>去<sup>しよ</sup>す<sup>す</sup>  
<sup>えん</sup>火<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>妻<sup>つま</sup>が<sup>が</sup>今<sup>いま</sup>朝<sup>あさ</sup>死<sup>し</sup>去<sup>しよ</sup>す<sup>す</sup>  
<sup>い</sup>いた<sup>た</sup>所<sup>ところ</sup>が<sup>が</sup>仰<sup>おほせ</sup>せ<sup>た</sup>ま<sup>は</sup>り

招待状

小生事

此度中山一郎氏媒酌により春野茂氏長女清子  
と結婚致すこと相成り十五日午後より向島中村樓に  
於て其披露を仕り度御多忙中恐縮を御出下  
さし度御案内申上候



全窓會案内狀

一 時日 五月十日 午後一時

二 全窓會元十回例會

三 場所 ××俱樂部 (電車×下車)

四 會費 金參圓

五 餘興、筑風琵琶 貞水講談、其他

昭和五年五月五日

幹事

水野一郎

通知狀

父源吉事永く病氣の所養生叶はず本日午後六時死去来り十三日自宅にて告別式を営み法養生に埋葬仕るべく右御通知申上候

昭和五年六月十日

山田 實三



花奔を贈る

花奔を贈る

今年初めて栽培を試みた安貞生  
の菊です花はお目にかけてもよ  
一枝に咲きまゝたが下葉が氣に  
なりませんお目にかけては  
お置き下さいませ

書籍を贈る

××博士著聖哲遺稿一部  
贈呈いたします本書は現代  
の書として再読し価値十分あり  
ものと請みゆくうちに襟を  
多く近來の良書と存お目にか

書籍を贈る

虫籠よまゐて

もう秋の風が吹き、さびしくなりました。持  
灸の、やさしく、鈴虫、大空の友人  
が、の持ちつ、来し、去りし、たのびです。虫  
の場所柄が、いゝ音で、さびしく、まじ、お庭  
の、広いお方は、育ち、頂けば、本望です。

目録

一 置時計

巻首

本會員一同ハ會則ニ依リ副會長  
石山堅司君ノ多年功績ヲ認メ茲  
ニ記念品ヲ贈呈ス

昭和五年五月五日

×青年會長 本田一郎

寫眞をおくる

いつぞやお約束の寫眞やうやく出来上り  
ました。それが最近と私です。純念ブツク  
にお入れにあるところで「だから妙に  
濟ましてしまひました。場所は砂  
京大森海岸です。何一と近頃の寫眞  
屋さんはいやに藝術寫眞とまねると  
見えて飛んだお化之標あものが出来上り

柿の札

拝啓 御起居如何に御座りや好便に任せ  
佳果御お授に預り奉り謝す。多年お思  
ひ今日に果し申す。右御礼旁に。 敬白。

十月二十八日

根山斎齋庵主

愚庵禪師御もと

み佛ほつは 供ともくありの柿かき十五  
柿かき熟じやくす 愚い庵あに 猿さるも 弟子でしも なく

釣鐘つりかねといふ柿かきの名なをかき  
捨すてがたくて

釣鐘つりかねの帯おびのとらふか止とどかりや  
出でたりぬ御ご此こゝ正ただ可たふ被たふ下さ候くわう

(正岡子規)

友人を紹介

友人ゆうじん田中たなか一太いちた君きみを御ご紹介せうかい申まをし上あげま  
す今いま人ひとは 数かず年ねん来きの農い友ゆうに 々々々々今いまの  
今いま人ひとでも 特とくに 眠い怒どのものが 御ご  
多おほ用よう中ちゆう忍にん縮しゆくで すが 御ご列れつ見けんの上うへ何なにか  
の御ご高かう配はいの儀ぎ於お上うへます。

友人を紹介

會社員を紹介

拜啓 其後御無沙汰致し小益御社  
 健に入らせられ賀し奉小さて之書  
 面持参の者は私全勤のものを今夜會  
 社の業務拡張の爲御地へ出張先  
 へて御尊宅拜訪仕る予定に

つき其の節は御多用中恐れ入  
 り小へとも御引見下されこの向に  
 御便宜計らひ下さらば幸甚  
 の次牙に小  
 右書中御乾中交斯の如  
 に所望候。

拜  
日

縁談問合せ

其後<sup>この</sup>は之<sup>の</sup>に即<sup>ち</sup>舞<sup>舞</sup>音<sup>音</sup>中<sup>中</sup>評<sup>評</sup>事<sup>事</sup>  
 小<sup>小</sup>頃<sup>頃</sup>白<sup>白</sup>夷<sup>夷</sup>後<sup>後</sup>備<sup>備</sup>了<sup>了</sup>と交<sup>交</sup>比<sup>比</sup>中<sup>中</sup>標<sup>標</sup>印<sup>印</sup>撰<sup>撰</sup>  
 嬢<sup>嬢</sup>もくわ<sup>くわ</sup>世<sup>世</sup>永<sup>永</sup>大<sup>大</sup>慶<sup>慶</sup>に存<sup>存</sup>し小<sup>小</sup>さて  
 妹<sup>妹</sup>敏<sup>敏</sup>子<sup>子</sup>義<sup>義</sup>高<sup>高</sup>等<sup>等</sup>女<sup>女</sup>学<sup>学</sup>校<sup>校</sup>卒<sup>卒</sup>業<sup>業</sup>  
 后<sup>后</sup>引<sup>引</sup>続<sup>続</sup>き、京<sup>京</sup>政<sup>政</sup>部<sup>部</sup>研<sup>研</sup>究<sup>究</sup>科<sup>科</sup>人<sup>人</sup>道<sup>道</sup>

中<sup>中</sup>ま<sup>ま</sup>所<sup>所</sup>今<sup>今</sup>友<sup>友</sup>松<sup>松</sup>山<sup>山</sup>縁<sup>縁</sup>部<sup>部</sup>氏<sup>氏</sup>へ縁<sup>縁</sup>  
 談<sup>談</sup>の事<sup>事</sup>すめ<sup>め</sup>ら<sup>ら</sup>水<sup>水</sup>小<sup>小</sup>に付<sup>付</sup>似<sup>似</sup>合<sup>合</sup>は  
 き縁<sup>縁</sup>に<sup>に</sup>より差<sup>差</sup>違<sup>違</sup>け<sup>け</sup>た存<sup>存</sup>じ<sup>じ</sup>も即<sup>即</sup>  
 今<sup>今</sup>家<sup>家</sup>の<sup>の</sup>こと私<sup>私</sup>方<sup>方</sup>に<sup>に</sup>ては一向<sup>一</sup>不<sup>不</sup>案<sup>案</sup>  
 内<sup>内</sup>貴<sup>貴</sup>所<sup>所</sup>には今<sup>今</sup>代<sup>代</sup>と即<sup>即</sup>同<sup>同</sup>部<sup>部</sup>と  
 承<sup>承</sup>了<sup>了</sup>定<sup>定</sup>め<sup>め</sup>て事<sup>事</sup>即<sup>即</sup>承<sup>承</sup>知<sup>知</sup>と



縁談問合せ

存小を以て内伺りに付何とぞ  
仰換標獲花あり所を誥下  
しるしとは叶ふまじや折々  
了抄新申すべし  
敬具

十月八日

道川三郎

田中明石様

貸家問合せ

近省前日申上げました通りよく音未  
即地人転却するに内定した。就てはさう  
お落付く家を見付けねばあつたかども  
いふ御女もよくお取申渡さるゝあがら  
御心算より之御高配下しませ。あつて御完  
の近づくて三日か五日の日ありよき家お探しあ  
はませ。何か御女への赴任、するに不案内唯ま  
貸家問合せ

貸家問合せ

お取引先ですより外に水もく家賃其他  
べては貴社におまかせ致します。お成る  
は本月平日のみに定まれば尤も都合  
よくどうか御尽力の程お祈り申します。  
あつし、その向は少住宅がある  
買ひのれ下りも早く。何かとも貴社  
お取引先にお任せ申します。お祈り申す。  
敬具

旅宿問合せ

この夏は少くも調べ物がありますの  
で用済温泉で一月程暮らしたいと  
思っています。これに付て思召の御  
知人にも温泉の  
御宿の御宿へ逗留したいと存  
存

すが今家<sup>とうけ</sup>まで印<sup>いん</sup>引<sup>ひ</sup>受け<sup>うけ</sup>下さるが  
せうか印<sup>いん</sup>懇<sup>こん</sup>意<sup>い</sup>に甘<sup>あま</sup>へお伺<sup>うかが</sup>ひ<sup>ひ</sup>した  
ます。折<sup>まが</sup>を見<sup>み</sup>て印<sup>いん</sup>多<sup>た</sup>合<sup>あ</sup>せ<sup>せ</sup>下さ<sup>さ</sup>りませ  
人数<sup>にんず</sup>は友人<sup>ゆうじん</sup>××君<sup>くん</sup>と二人<sup>ににん</sup>本月<sup>ほんげつ</sup>末<sup>まつ</sup>当<sup>たう</sup>  
地<sup>ち</sup>出<sup>い</sup>発<sup>はつ</sup>の予<sup>よ</sup>定<sup>てい</sup>です。印<sup>いん</sup>面<sup>めん</sup>倒<sup>たう</sup>くら  
お影<sup>かげ</sup>して申<sup>まを</sup>譯<sup>わけ</sup>ありません。

追悼の句に添へて

拜啓<sup>はいけい</sup> 今<sup>いま</sup>般<sup>ぱん</sup>故<sup>こ</sup>嘉<sup>か</sup>陳<sup>ちん</sup>先生<sup>せんせい</sup>印<sup>いん</sup>身<sup>み</sup>忘<sup>わす</sup>れ<sup>れ</sup>に付<sup>つ</sup>  
記念<sup>きねん</sup>の品<sup>ひん</sup>御<sup>ご</sup>惠<sup>けい</sup>授<sup>じゆ</sup>被<sup>ま</sup>下<sup>くだ</sup>奉<sup>ほう</sup>謝<sup>しゃ</sup>小<sup>せう</sup>生<sup>せい</sup>  
は小<sup>せう</sup>生<sup>せい</sup>常<sup>じょう</sup>般<sup>ぱん</sup>名<sup>な</sup>会<sup>かい</sup>寄<sup>き</sup>宿<sup>しゆく</sup>舎<sup>しゃ</sup>時<sup>とき</sup>代<sup>だい</sup>能<sup>ねん</sup>無<sup>む</sup>秋<sup>あき</sup>日<sup>ひ</sup>  
とて御<sup>ご</sup>世<sup>せい</sup>話<sup>わ</sup>に相<sup>あ</sup>成<sup>せい</sup>景<sup>けい</sup>仰<sup>かう</sup>致<sup>ち</sup>居<sup>ゐ</sup>外<sup>がい</sup>  
のみあらざ殊<sup>こと</sup>に紀<sup>き</sup>行<sup>かう</sup>文<sup>ぶん</sup>の御<sup>ご</sup>添<sup>せん</sup>削<sup>さく</sup>せ

追悼の句に添へて

忝うーたることも有之今更々  
く感慨を深く致候少生近來俗教に  
追はれ句作も不致小共聊か追悼  
の意を表一度別紙御送付申上外  
仰笑函被下候は初外之幸福に存  
存小先は仰礼旁如斯に御座小敬具  
師の忌や春雨ごりのわらち路

祭礼に

朝夕寒冷を覚えりやうさるる  
皆標印安泰のうへに何れも結構の  
に存ます。や、て来る五十六日の  
村鎮守八幡神祭礼で神輿  
返御練り物、屋台引廻り等

祭礼に

り年日本は豊作の祝とかね夜  
分は村の若衆達之笑劇 素人お摸  
あどの餘興も亦あり 都の方の眼  
には珍らふからぞ思はれますのでお花  
り掛けにして仰出で下さりませ。

田園の友より

病氣見舞

御病氣は如何ですか。先達て付大かま  
るしき様に承り申したるが、結し  
良好ですか。候し癒り際が大却し  
き、ました申し上げますのでし、あ  
ませんか不順の候 御振養ありませ

火災見舞

昨夜の火災より印類焼のよし今朝の  
 新聞より承了致しきたりく  
 御珍宝灰燼にきり残念と推  
 察何んとお慰めたりて冥きかえ  
 の辭に窮しまた幸より御哀憐皆

様無事迄きあき、い、たし  
 ことよりだけ不幸中の付合せ  
 様ト早速御見舞子糸上いた  
 たいと思ひますが取り及ぶ防寒用と  
 して布圍つ紐西川商店より届け  
 ること致しまた御受納下さい

見舞状

見舞状

酷暑凌ぎ、維新折柄皆杯の御機嫌申  
伺申上小。

近年稀北多、寒気皆杯申、変り無く外  
也、仰見舞申上小。

御主人御旅行御留守をお見舞申上ます

春の散歩に

明<sup>あけ</sup>の神武<sup>しんぶ</sup>天皇<sup>てんかう</sup>祭<sup>まつり</sup>は晴<sup>はる</sup>天<sup>てん</sup>々<sup>々</sup>

この好<sup>この</sup>期<sup>き</sup>節<sup>せつ</sup>を家<sup>いへ</sup>に煙<sup>けむり</sup>り居<sup>ゐ</sup>るも残<sup>のこ</sup>念<sup>えん</sup>

少<sup>すく</sup>至<sup>し</sup>井<sup>い</sup>まで徒<sup>と</sup>歩<sup>ほ</sup>、寛<sup>かん</sup>永<sup>えい</sup>の頃<sup>ころ</sup>枯<sup>か</sup>点<sup>てん</sup>、

と云<sup>い</sup>ふ十日<sup>じふにち</sup>本<sup>ほん</sup>を觀<sup>み</sup>望<sup>ぼう</sup>したくと思<sup>おも</sup>ひます、

仰<sup>おほ</sup>人<sup>ひと</sup>多<sup>た</sup>月<sup>つき</sup>妙<sup>たう</sup>何<sup>なに</sup>花<sup>はな</sup>間<sup>ま</sup>乱<sup>らん</sup>舞<sup>ぶ</sup>隨<sup>ず</sup>音<sup>おん</sup>。

春の散歩に

雪の妙高へ

雪の妙高へ スキー一実習に参り  
たいのびす 伴付 数人 何れも 運初  
部も 連中 です 是非 共貴兄の如き 山  
岳 研究家 の 所 全行 多 難 なく 者  
貴意を之度 日 時 程 等 上 にお 談

鹿野山から

鹿野山(冬)より 執筆 した 居る。弘法大師  
は 山上の 平地が 禪を 修す きた 適す ところ 高野  
山を 用か たり。天下に 山は 多けれど 山上に  
平地 あり 山は 開西 には 高野山 あり の  
み 開東 には 唯 鹿野山 あり の み



山の頂上<sup>ちんじやう</sup>の成<sup>なり</sup>りの幅<sup>はば</sup>ありと長く数十<sup>とくじゆ</sup>の人<sup>ひと</sup>が  
 指<sup>さし</sup>え西端<sup>せいたん</sup>の鳥居<sup>とりゐ</sup>崎<sup>さき</sup>眺望<sup>てうぼう</sup>よく十二<sup>じふに</sup>の物<sup>もの</sup>を見  
 らた<sup>ら</sup>し申<sup>まを</sup>候<sup>こう</sup>。東端<sup>とうたん</sup>の九十九<sup>くじゅうじゅう</sup>谷<sup>たに</sup>より牧<sup>まき</sup>千<sup>せん</sup>両<sup>りやう</sup>  
 の山々<sup>さんざん</sup>を見下<sup>みくだ</sup>し申<sup>まを</sup>候<sup>こう</sup>。山<sup>やま</sup>の合<sup>あひ</sup>多<sup>おほ</sup>く時<sup>とき</sup>鳥<sup>とり</sup>が  
 きりに鳴<sup>な</sup>きます。きのひけふはお城<sup>おしろ</sup>を借<sup>かり</sup>着<sup>き</sup>  
 した<sup>した</sup>居<sup>ゐ</sup>申<sup>まを</sup>候<sup>こう</sup>。

(大町桂月)

金談を断る

御手紙お見

折角<sup>せつかく</sup>だけれども今<sup>いま</sup>貸<sup>か</sup>してあげ<sup>あげ</sup>る金<sup>かね</sup>はあ  
 い。家<sup>いえ</sup>僕<sup>やく</sup>あんな構<sup>かま</sup>やいふから放<sup>はな</sup>つて置<sup>お</sup>き給<sup>たま</sup>  
 へ僕<sup>わが</sup>の親<sup>おや</sup>類<sup>るい</sup>に不<sup>ふ</sup>幸<sup>さう</sup>があつてこれの葬<sup>そう</sup>  
 式<sup>しき</sup>其他<sup>い</sup>の葬<sup>そう</sup>費用<sup>ひようぎゆう</sup>を少<sup>せう</sup>し并<sup>な</sup>どをやつた。今<sup>いま</sup>

はうちには何にもない僕らの紙入にそれ  
は上げろがこれだからだ。

君の系稿を本屋が延ばす如く君も家賃  
を延ばし給へ。愚問々々云つたら取れた時

上げるより外に致し方がありませんと取り

合はずに置き給へ君が悪いのでなから構は  
ては少いか草々  
(夏目漱石)

全憲会通知

今圃わが全憲会會員水野玄一郎氏

××会議随員として全権委員と

共にロンドン出張すること、お定まり

り外に付全代を行を盛んにし旁

全憲会として快談いたしなうた

事項御承了奮て御出席相致  
友御通知申上げ候

- 一 時刻 一月六日午後一時開會
- 一 場所 ××公會堂
- 一 會費 金壹圓當日持參
- 一 餘興 種々

幹事

転居報知

お笑ひ下さい、ますますな又々転居いたすこと  
とありました。母の要求を容れて居  
ては百年河請を待つ以上によい家の見  
つかることは無いです。鶏の飼へる広  
場があるを理由で取りやめた家です。

上京報知

前便申上げ候通り、いよいよ本月十八日  
 篋を買ひて東都に遊ぶいと、お成り小  
 萬事不案内にて、いろく心許なく思は  
 れ小御地到着后は、何分とも御世話致し  
 たく唯今より御致しつた、置小。

稲作報導

(身より兄へ)

兄の様毎日の勉強ですか、稲の作柄を  
 知らせ、仰書面より概況を申上げま  
 す。一時天候が気遣はれたが、土利よ、つ  
 て回復、近年稀に見る暑さのため  
 メキくと見事、倉には穂に穂が、よく

くとしん小豊年ほとあとありましたお父様  
 は及三石は獲れりと喜んでとられま  
 す。そして村ではつお秋大祭りおほまつりと一  
 やうと今から大騒さわがをして盛ります。  
 足ノ標あしのしるしもこの折は花はなりかけで帰かえつ  
 ました。お中健おんちやかです。

### 謹賀新年

もう間もなく我々が文際かうさいを始はじめた一週  
 年記念日ねんきんじつが来る。お一年の間に君が病中  
 の僕にたいていおこしてくれた友情ゆうじやうが友のすくふ  
 い僕にとつとれだけ貴たかいものじあつたかはおも  
 知しつしめしてくれらう。僕はこれを年賀ねがとるまで  
 喜んでおい。どうか今年はつるが譯ちえん山あつてくれ  
 ー君のためにして僕のためにも  
 (石川啄木)

年頃杖とうけし

あやふいふけ

はまやみせやめ

まよふとくに

ゆか〜うほる

梅し〜一花

友人に

此頃は夜毎に看と夢みぬとは無い昨  
 夜で三夜続いた！何事も取りとめあふ夢  
 あがら、この夢も色金体が一種か陰樹附  
 悲哀ある趣がある！あゝ光の快惘あり  
 希望せ看と共に夢みることの一本末ふ、  
 のは愁ふに是のからだの不健全からかであ  
 り小夢あから僕は悲みに堪へない。  
 (馬山徳牛氏)

友人に

貸金催促

前日函云可奉ればとの事にして印用立中  
 一また金子明友<sup>ほうりゆう</sup>より来て印催促  
 ものかとは存ありますが他から融通大  
 上<sup>よしみん</sup>用年したせりか印都合<sup>つがひ</sup>ありませ  
 うとは存ありますが印通<sup>いんつう</sup>洲<sup>しゅう</sup>ありませ

掛金催促

一、××画伯伝授画会 五面掛金  
 金五百円也

右貴下分未收<sup>みけい</sup>と成居り小所幹事<sup>かんじ</sup>と  
 一、<sup>せいり</sup>敷<sup>しき</sup>正<sup>せい</sup>理<sup>り</sup>に因却<sup>いんけつ</sup>付<sup>つ</sup>り居り小に付印支<sup>いんし</sup>  
 拂<sup>はら</sup>込<sup>込み</sup>の交<sup>まじ</sup>印<sup>いん</sup>借<sup>か</sup>信<sup>しん</sup>中<sup>ちゆう</sup>之<sup>し</sup>小  
 幹事 本山 寛

書物催促

啓!!唯今社レが貴兄宛ノ紙一封差  
 上レ所御出社ニおふくともるにて使ハ  
 者置ハき来り候に付再ハ公用ニ申ス也  
 昨ト日来レクレスト種切レたて困ラり  
 故取りにやりたる事ハの用事ニあり申ス又

フニてに袴ヲも改使シ一レ所返シ被レ下ニ友  
 と申達ハはレいお元ノ力ヲ用ル事ニあり申ス  
 其ノ外ハ用ル事ニて前便ニは書志ヲ忘れテも  
 の唯今書送ル申スい  
 貴兄もし小生ノ書籍ヲ持歸リに成リ  
 小生ノ自録ヲ送り被レ下ニ友



又其中に

一家二十句

俳書年表

と有之外は、それだけは至急御返付  
被下度候 以上

(正岡子規)

手傳ひ依頼

明日は火掃除に當りますので、然らずに  
急に書生が国之軟病氣に帰玉、  
た一人も不足して困ります。甚だ即送  
感とは存じますが、お平伝もございませんで  
せぬ御懇意に甘く懇軟申します

寫字依頼

四半字詰系稿紙五枚許りの寫札  
 二枚あり之日付のお付多しと申す  
 傳紙はるすゝと報酬之儀は一  
 日拾圓程にお約束に申す  
 一交り都合ありと云ふ候

女中依頼

私共工御に之を数名一戸借り上げ  
 自炊生活に之をたくつし申す  
 今更に之と云ふと解せざる  
 彼も今女中と云ふ事ト云は是  
 能事急申すに之をなく申す

友人を紹介

私の友人佐藤文雄<sup>さとうぶんゆう</sup>君を紹介<sup>せうかい</sup>させていただきます  
 余<sup>あ</sup>氏は美術<sup>びいどう</sup>に深い趣味<sup>しゆみ</sup>をもたれ常に  
 之<sup>これ</sup>の研究<sup>けんきゆう</sup>を怠<sup>おろそ</sup>けず居<sup>ゐ</sup>るのです。お宅<sup>たく</sup>へ  
 伺<sup>まゐ</sup>りませう。大<sup>お</sup>節<sup>せち</sup>は御<sup>ご</sup>面<sup>めん</sup>接<sup>せつ</sup>を承<sup>うけたま</sup>わります。余<sup>あ</sup>氏は  
 の御<sup>ご</sup>社<sup>しゃ</sup>に決<sup>けつ</sup>りやうござんす。お宅<sup>たく</sup>へ

人を紹介

振<sup>しん</sup>腹<sup>ふく</sup>口<sup>くち</sup>先<sup>せん</sup>は矢<sup>いっ</sup>礼<sup>れい</sup>仕<sup>し</sup>存<sup>ぞん</sup>丸<sup>まる</sup>の<sup>の</sup>戸<sup>こ</sup>へ  
 申<sup>まを</sup>しやり小<sup>せう</sup>處<sup>ちよ</sup>如<sup>い</sup>何<sup>か</sup>美<sup>み</sup>世<sup>せ</sup>か今<sup>いま</sup>に去<sup>さ</sup>て  
 来<sup>き</sup>らる。国<sup>くに</sup>一<sup>いつ</sup>ても冬<sup>ふゆ</sup>より居<sup>ゐ</sup>るかと存<sup>ぞん</sup>じ多<sup>た</sup>うわ  
 事<sup>こと</sup>と存<sup>ぞん</sup>じ小<sup>せう</sup>ま先<sup>せん</sup>の申<sup>まを</sup>上げーとはち  
 かい少<sup>せう</sup>くとも恰<sup>かつ</sup>好<sup>か</sup>の仁<sup>に</sup>思<sup>し</sup>ひつきりませう

差出候 昨年の交の英文科出にて  
 牛腕 常識世故等十分なる人に御座り  
 毎日新多の第一面編輯を殆ど  
 入てやつてお多人に御座り御座り  
 被下候上にて勿論何れも御座り  
 申の免し角も御座り  
 (鳥村抱庇)

晩餐会に招待

昨午五日は聊か祝儀あり拙宅にて近  
 親だけ集ひ母の手料理にて小宴を  
 催すにたつた。とうで御座り不新着  
 のきりお越しをうませ。お母にお待ち  
 して居ります。

招待状

拜啓 明二十四日のクリスマス又は午後六時から拙  
定で祈禱式を営み式後カードを交換し飾物  
分與を、たゞ教會福音師宮田先生をお款し  
て場の御講話を乞ひ樂しむを過したる存  
します年に一度の神聖の集ひ故御来会下さる敬具。

婚禮招待

長男宏儀松川八代の媒酌により山本  
専之助長女春子と結婚の儀教正ひ本旨五  
日小定に於て結婚式奉行致し候ら付今年  
后六時より披露小宴お用き申可御多用  
中御迷惑と存候（共御来臨願上候

開業祝

お祝い  
かねく 御祝望通りめでたく御開業  
由お喜び申す 附近には大姓あり  
御生業 他 書籍店は尤も 御開業は  
御業を以て 発展期にて 待た  
べく謹んで御祝申します

本日は此とるやう用向にて 他行系と  
併り御祝申す 御開業は 御開業  
お祝い 御開業は 御開業  
御開業は 御開業  
御開業は 御開業  
御開業は 御開業

敬具

出産を祝ふ

今朝は男の子さんがお生まれにあつたや  
うですわおめでたう。比呂様のお花びほど  
ふあでせうか。お二人とも御トやうぶです  
か。おたすにちや、いませ。  
お産衣お祝のうらまげに。

新築の祝

先日某邸新造の邸実印竣工印  
引移りを済ませられまの御祝に印  
招き下され有りがうく存じ  
横親的印設計の趣に伝承た  
近日拙宅に某上付まぐく心廻らそ小

病氣見舞

今日川村さんからお伺ひ<sup>ま</sup>ましたと云  
 お風邪と云ふこと、お大事にしてくださいか  
 いてよかーんぱい、ありがとうございます、よく養生を  
 して早くなほすく下す、<sup>とくに</sup>翁館<sup>の</sup>  
 到来いたせーものお目つけます。

暴風見舞

昨夜の<sup>つ</sup>評分<sup>は</sup>は劇<sup>は</sup>ーと云ふました子  
 供達はおびへて一夜眠<sup>ら</sup>ずませぬ。  
 起きて見ると庭は一面に<sup>は</sup>庭木<sup>の</sup>散  
 乱し目も當てられぬ有様でーした。  
 新アムと云ふと<sup>は</sup>堵<sup>方</sup>で被害<sup>か</sup>ありました



標<sup>マ</sup>でも 丁<sup>チヨウ</sup>友<sup>ユウ</sup>貴<sup>キ</sup>下<sup>カ</sup>印<sup>イン</sup>業<sup>ギョウ</sup>船<sup>セン</sup>日<sup>ニチ</sup>に当<sup>ア</sup>る  
かと思<sup>オモ</sup>はれ 一般<sup>イッパン</sup>心<sup>シン</sup>痛<sup>イタ</sup>ソ<sup>ソ</sup>な<sup>ナ</sup>て居<sup>イ</sup>る  
お業<sup>ギョウ</sup>込<sup>コ</sup>みにおありー や否<sup>イナ</sup>や 模<sup>モ</sup>標<sup>マ</sup>と  
御<sup>オノ</sup>通<sup>ツウ</sup>知<sup>チ</sup>彩<sup>サイ</sup>一<sup>イツ</sup>切<sup>キ</sup>てせうか。

尚<sup>ナウ</sup>子<sup>コ</sup>書<sup>ショ</sup>状<sup>ジョウ</sup>は 御<sup>オノ</sup>予<sup>ヨ</sup>定<sup>テイ</sup>しより 神<sup>カン</sup>戸<sup>コ</sup>  
××××× 宛<sup>オウ</sup>に 発<sup>ハツ</sup>送<sup>ソウ</sup>いた<sup>イ</sup>す<sup>ス</sup>た。

病人への手紙

あふは 病<sup>ビョウ</sup>気<sup>キ</sup>で 寝<sup>ネ</sup>ておるさうですわー  
ちよとも知らなかつた 痛<sup>イタ</sup>い下<sup>カ</sup>せう。然<sup>シカ</sup>し内<sup>ウチ</sup>  
臓<sup>ゾウ</sup>の病<sup>ビョウ</sup>気<sup>キ</sup>よりは まだ 楽<sup>ラク</sup>がし知<sup>チ</sup>れな<sup>な</sup>い。幸<sup>イハ</sup>  
抱<sup>ダ</sup>えな<sup>な</sup>い。  
本<sup>ホン</sup>が 読<sup>ヨ</sup>みた<sup>た</sup>と云<sup>イ</sup>ふか<sup>か</sup>ら 何<sup>ナニ</sup>か 送<sup>オウ</sup>つて

あげようと思ふが何をあげてい  
か分らふい。

注文があるから買つて送つてあ  
げませう。どんふ、煙草の本ですか云つ  
ておもしろい。無事よ高いのは  
いけません以上。

(夏目漱石)

洋行する人に

拙啓 貴台には英佛両王人御留子  
お成りことに決定本月廿八日よく横  
濱出帆の執由丸にて御改政の由年  
末の御宿意お叶ひ定め御満足の  
こと、推察いたすべし

洋行する人に

まことに我が御黨ごとうにおける先駈者せんかに  
 あらせらるゝの英えいらつては小生等迄  
 得意とくいにて小申こまうとくも予を以て承うけたまり  
 が風土異ふうどい、ある土地の御生誥ごせいご叩たた自愛じあいま  
 に致いたす外御多赦ごたじや系中お趨おかけ祝辞しゆじ中とくも  
 矢礼やれいと存ぞん書状叩祝しゆじ申まう云々  
 敬白

病死者の靈前に

この牛紙うしじを一夫様いちふさまの靈前れいぜんに供ともへます。  
 生者せいじやは必滅ひつめつし會者かいじやは定離ぢやうりすとは  
 俾者まじりの刻ときへながら私は一夫さんと袂たもとれ  
 やうとけ夢む想むだも致いたしませんでいた  
 どうしても故人こじんとおられたとは考へられ

ませぬ。お互たがいにこの道で立派りっぱにおらふと  
 契ちがつた言葉ことばはあまりくと耳みみ鼻はなに残のこつて  
 居います、わが世界せかいは前途ぜんしゆにありと、  
 高唱かうせうされて居いられた一夫いつふさんが幽明境ゆうめいけいを  
 異ことにされやうとはどうしても信しんじられな  
 い位くらいです。一夫いつふさんはどうして私わたしをおも勝かつ

ふ久遠くゑんに世界せかいへ人往じんわうされたのでせう。悪あく  
 いは病魔びやまです。あなを健康けんかうな未来みらいある人  
 を幽境ゆうけいへ伴ともひりくつてすもの……

お山吹貴方やまぶきあなたは何なにより好すまれて居いられた  
 一ひと枝えだつ、いんで靈前れいぜんへ向むかいます。抑おさげは  
 すくすく下くだりますか。

弔詞

松本青年會會員一同ハ客員飛行士川本  
藤吉君ノ斯界犠牲ノ死ヲ悼ミ茲ニ謹  
テ哀悼ノ意ヲ表ス

松本青年會々長

山 川 滋

昭和五年  
九月十六日

弟の入選を喜んで

今朝の新同下着の衾に入選を知つた。  
嬉しからた。多年の勉強が案外早く  
むくいられたかと思ふ。僕自身の名譽の  
やうな元々すうお母さんがお喜びだらう。此  
を機会に一層研鑽し給へ。油断慢心禁物だ以上。

弟の入選を喜んで

祝詞をうけて

祝詞をうけて

口今くちまは去年こぞ紙かみ有りあり程ほど存ぞんじます。

実はあの絵ゑの入いれ運うんについそは是上こゝろから

イカ一番いかにに祝いわつて頂いたたわけいて一層いっぺん威い

謝いして参まります。ようも少いしと自信じしんが

持もたず、掃まく百もうて愉快うきやくでたか掃まき、

祝詞をうけて

上げて見ると馬鹿ばかに醜みにく悪くに見えて

仕方いかにが未ま知らたのぞ。入いれ運うんしたのは控ま

侍さむらいです。たゞ今夜こんやのことは私わたしに方かた向むを

示しして下さくださるから、その大おほと特とくに表あ

人ひと下くださります。

時とき節ふし柄がらの自みづか愛あを祈いのります。とりあふお礼おれいまで

世話にありて

恭敬 御地遊ごちゆう子中しちゆうは兄弟も及およばざるしんがう教交  
 を賜たまはり深くかみ感銘かんにんいたし小前こまへ月つき卒然そつぜん老父  
 死亡しつじやうのためがしげふ此中こちゆう業ごうをふ祭まつり又また祖その業ごうとついで継承けいじやうい  
 だすことありとしかたぬ帰かへ々々のまじらしまじ学校  
 の方かたも退たいひ止とむあきに至いたり流ながらたつても

格段かくたんの御配意ごはいいをえ小事かんとしや感謝かんとしやのまじりに小  
 御厚情ごこうじやうの程ほどは永ながく忘却わうしやく仕つかるまどく近ちか業  
 上あひま御挨拶ごあいさつ付つけなく心算しんさんに少人せうじん共とも取りあ  
 へず御礼ごれい申まを上げ小末こまへ業ごうあがら御令ごれい圍いへ  
 も方々かたがたより御ご儀ぎへ下くだされなく小

敬白

病中妹へ

たびく文被下ルかみくわふへど今も百もせず  
 打込小と叩ゆる可被成あきまへり  
 先づく叩こたまも叩こく叩こ勉強べんきやうの由何  
 珍えき言ごに叩こるに有ある吾われも去いるぬら  
 自らみづかり一ひとまし病びやうも打臥うちふし居ゐりつくぐ

思おもひ見みるにまるとやすぎに一年いちねんけあ  
 ちとにありし御身おんみ等らとなのなき笑わらの中  
 にかまた等らのあまびにくら居ゐるいひ  
 か今いまとりては之これにありて知らぬ土地とちにひと  
 り病びやうの床とこにうつけらよと思おもひつけしふ  
 みだ思おもはず頼たのみかけり申まをす



当地は天気時候はるかたに鶴ついで  
 はま〜くゆ〜どし我目の中はかへつこ  
 あれす〜ま〜も〜る里〜かいきり方  
 たは〜く存小。今ころは〜か〜し〜御くら〜  
 被成小やえ。夢のかよひ路とかく清い  
 可とたどり申小

他多く修業の身よてふまめ〜キ事と  
 笑はるかは〜ふれども涙とふきけり身  
 はずやるせあ〜ものた御存小御推察可  
 被下小。病氣し全快した今日より学校に去り  
 可決して御心配ふきりま〜くか時下折角おいと  
 正被成御勉強可被成又時々は紙御送り下され小  
 ( 芳山 櫻年 )

旅に出て

旅に出て

酒一合を飲みおわんかきの田舎やきり高  
で飯を喰つたがウマクなかつた。ごろりと寝  
こらんで見たが面白くもおかしくもない。こ  
紅茶を乃ねて二杯飲んで見たが、亦も内を飲  
ましてもいふ程うまくない。寝るには早い。寝  
る前に風呂はいる積りだが、其よりまた早い。  
ここで旅の紙を書きだした。

旅に出て

西国の停車場まで来る途中は何もお  
荷物を困らした。車が動く毎に左右に落ち  
て来たもの、これとカ一パイに抱いて居るイヤハヤ  
見ら小赤い団であった。  
停車場へ来た頃と三十分以上も早い待つて  
居る内にも少し寝付けがし不快で堪らなかつた  
年八人づめの二等室。六人のお客様。之の軍隊だ  
その騎兵大尉。そして一人四半三のキザな男と三十

四五の書生と商人とを以て男とて  
自身と合せて六人。

四十二のキザ男はイバネスと名乗り先のことか  
た靴とはいて長足の顔のゆ平たらしく大  
あま男くオマケに眼鏡をかけ居た。お若さん  
のスキヤコつち男と思つた。二の軍醫の人は若  
い。元氣のよい駒井さんやうも男一人は老人で近  
頃人が足りあつて豫備から引き出されよう。

先生。その二はは談話として居たが他は皆黙つ  
て居た。妻のまのやうも商人のやうも男は二の羽  
織で雑誌太陽をど読んで居たが腹をぬる  
悪い奴で隅の方でカキで見たり、アケラセか  
いて見たり一つの風呂敷お包と一つのツツリのおま  
きたあいみやげかばんと持てあまして居た。要  
するに先入りうもい男だと思つた。

騎兵大尉は年の若く割合に短ヒゲの多し男

でありながら中々人出は五派で軍人らうかうた。  
 旅行案内とヒネクつてばかり居る所を足と来  
 の線路の旅は却りしうしと自分思つた。  
 市川の鉄橋を渡るとすぐ市川停車場がある。こ  
 りから瑞の台は近し軍醫の三とキザ男は又所  
 下車した。大尉は幕張の停車場で降り書  
 と商人のアイコは千葉を下りさせて此から斯く  
 申す拙者スのついで二十八人乗の客車と荷物

顔に指領して了つた。然し何れも身体の具  
 合が悪い。在室の外は京は妻雨彼たふびき、  
 水多青く茶の花黄いろにひばりは空で赤い  
 桃や桜の散り残り残つたのが一般の気持ある  
 ちと決して不足はあつけれど然し気が引  
 たくあひ。ちしてやりたくなかつた。何を。パイ  
 一件を。たぐ一口やるふら悪くもあからふと  
 からピンを出してセンを接くとあかく接けあひ

キルクが切れやうにあらうた。いそを思ひ止まら  
て又籠かごに大おほに林檎りんごをむいて見をが虫喰で  
のマツサ加減かへんをうふい之も中止ちゅうしした。

佐倉さくらの停車場につくとお茶におすし、おすしに  
お茶と気きのあい声こゑで老人が車窓の前まへにま  
た。せめて茶でも飲めと一びん三錢五厘、茶  
の湯ゆの熱あついと、茶と飲のむと生なままかへるや  
うもえかした。ニ杯はいつけさまに飲んだ。

サア茶碗ちawanが出来たと男おとこと倒たふれかやりたく  
てたまらふい。そこで又籠かごから出でして今夜は  
注意ちゅういしてセと校かきたかうた。やつと校かけた。  
一めたと思おもうた。すぐ一杯一杯やうた。三杯三杯やうた。三  
て感かん心しんふことには二杯二杯よりうた。全身ぜんしんカ血脈けつみやく  
か一時ひとときに活か動どうして急に之これもか出でた靴くつ子こまで  
遂ついに一人。その下した寝ねて見みたり起たちて見みたりして  
誰たれも退たい屈くつが困こまりした。

銀子の停車場から今夜は車云い代償を  
 三銭 喰鶏館に着くと一隊の女隊が今一  
 も帰るところ、伝で宿帳と見ると白木橋大伝馬  
 町の商人でヤが十三歳から二十四五まで五人  
 男が三人 最初喰鶏館の裏門で遇つた時何  
 處かお嬢様かと思つた。何やら当世のハイカラ風  
 俗、チエー一足遅かつたとも何んとも思ひはし、  
 が傳い少一は惜しからうと云ふ氣がした。

喰鶏館のおかみは自分と記憶して居た。年増  
 のおやゆりか自分も傳い少一と云ふつた。  
 板と見ると合ふものがあつた。傳い自分は  
 喰ひたつても飲みたつてもない。少一も早く其の病氣  
 と恢復した。今日も流車の中で、ワウくと思つ  
 た。健康は幸福の第一要素だと近所の室で  
 二弦琴の調子、その音がする。外は彼の音が

何んだか悲しいやうな気がして来た。  
 まさにありふらお春もお春さんもおばあさん  
 子供も皆で、お家に二晩ほどとまると  
 見たい。  
 二弦琴だと思つたら月琴であつた。餘りよ  
 てもふいやうだ。  
 今夜は千紙は止す。  
 母と子供を大切に乾かす。

(奥田獨歩)

むさし野の家、田舎町から旅に出かけて  
 何んか冬眠の蚕が目覚め、やふふ又は、め  
 て四月の春にめぐり合ふ、やふふ心地がいい  
 まま、富士も愛知もあつた、また、筑前  
 山を越しては沼津の、興地まで、千里とやし  
 だ、おぼろしいおぼろしい、柳林には思ふとも  
 去年の南支、妻の浮城、やふふ思ひ、よさ水  
 まつ、今日は何んとも、懐はつら、旅で隣の

2 —と煙茶と藪竹—

室の太お徳衛標一才お辞儀をいってけ  
 活れ  
 ぬふら私の部屋はぬひきりけり  
 の早あつ  
 不ふい眼が我まばかりをい  
 てよりまた  
 展びまのデツキで走るもく  
 老きふい鉄路と  
 見あがう目か  
 之歩いし来、過去  
 の道か  
 からは  
 了りりて  
 一まつ、あは  
 苦一  
 ふうら  
 わかつ、やふ  
 めか  
 うぬや  
 うら  
 ことを考へ  
 う又  
 ひと  
 輝い  
 輝う  
 うら  
 く  
 いる  
 飛んで  
 過ぎ  
 だも  
 かん

3 —と煙茶と藪竹—

ふい  
 じ  
 せり  
 ます  
 近江  
 路  
 ま  
 か  
 くり  
 ます  
 と  
 一  
 し  
 足  
 が  
 つ  
 め  
 た  
 ら  
 令  
 一  
 て  
 冬  
 り  
 ま  
 り  
 一  
 算  
 ざ  
 る  
 あ  
 り  
 け  
 り  
 は  
 ま  
 ぐ  
 梅  
 し  
 ま  
 氣  
 血  
 だ  
 じ  
 や  
 い  
 ま  
 ら  
 の  
 ら  
 う  
 き  
 の  
 が  
 枯  
 草  
 の  
 ま  
 よ  
 ひ  
 と  
 り  
 柔  
 か  
 ら  
 縁  
 と  
 奥  
 ド  
 の  
 び  
 て  
 と  
 り  
 ま  
 を  
 も  
 う  
 た  
 ん  
 く  
 京  
 は  
 近  
 づ  
 き  
 ま  
 を  
 ぞ  
 う  
 せ  
 う  
 じ  
 ぐ  
 い  
 ま  
 を  
 竹  
 藪  
 と  
 茶  
 煙  
 と  
 お  
 幸  
 々  
 屋  
 根  
 と  
 今  
 車  
 は  
 米  
 爾  
 輝  
 ま  
 着  
 き  
 ま  
 した  
 の  
 で  
 一  
 の  
 新  
 屋  
 と  
 ぬ  
 一  
 や  
 た  
 え  
 ふ  
 ひ  
 書  
 して  
 所  
 便  
 と  
 申  
 い  
 け  
 ました

罪のなげき外敷点



罪のなげき外敷点  
 道をもとむる人のあかにもまて八人<sup>トんせ</sup>を罪<sup>つみ</sup>滅<sup>ほろ</sup>ぶ  
 一きげふの  
 いものとして、それを定<sup>さだ</sup>めようとするものがある。  
 しかあがら否定<sup>ひてい</sup>「えふ、現象<sup>げんじょう</sup>の前<sup>まへ</sup>には、何人も  
 心おどろき、慄<sup>おそ</sup>かざるを得<sup>え</sup>ないものである。  
 救済<sup>きうさい</sup>のみかりは、怒<sup>おち</sup>めるものだからか、いやそ  
 める。まは、叱<sup>おち</sup>つけられ、罪<sup>つみ</sup>を、うて、昭<sup>あ</sup>らうて  
 くらる怒<sup>おち</sup>ふのあると、さうひかりは、うた  
 怒<sup>おち</sup>めるものと、併<sup>あ</sup>たつたものである。

プリンスウエルス山嵐峽の遊覧と日

美<sup>うつく</sup>しき山<sup>やま</sup>あり、ひかたて、ゆくり、ふく、うらや、  
 一<sup>い</sup>は、今日は、プリンスウエルス山嵐峽の遊覧と日  
 て、  
 五日<sup>ごにち</sup>遊<sup>あそ</sup>びし、風<sup>かぜ</sup>と、美<sup>うつく</sup>しう、光<sup>ひかり</sup>る、山<sup>やま</sup>と、は、道<sup>みち</sup>を、た  
 どり、し、うらや、うらや、うらや、うらや、うらや、  
 山<sup>やま</sup>の、うらや、うらや、うらや、うらや、うらや、  
 待<sup>まち</sup>ら、うらや、  
 4. 25 P.M.

大震災の折全階を空かせられ、その後の運移より  
京都におもむかれ、多岐伊丹より、陽明川、櫻の  
陶工白井半次と名に自う、五かき自う、歌より、陶器  
をやのせんと、始り、

土を干すもみんあ、と、橋より、日付、

供も、だ、と、名、と、歌、珍、を、

へら、と、い、て、つ、れ、く、と、自、を、新、や、

向、の、廣、野、と、茶、と、花、と、

一、囁、き、

た、ら、あ、が、ら、裾、も、つ、き、も、ま、

お、ち、は、ま、の、音、と、よ、お、と、

いと、ふ、く、も、身、を、は、く、と、

ても、あ、ま、の、と、ら、は、く、に、

焼山をすましてから奥入瀬川の瀬が高く

ふつふつと森の中へ入つて行く

— 和田湖に遊びてより —

何かしらに身よもつての殿のよ

せまりて来たり森ふかく入る

大いふともくさへよこるるもあり  
たえぬおふ山— づも生る

世に位あり けしふと たあし

のなれども へげし 貴人いんだらはず

うらかふも まき名に

人知れぬ奴隷へつらひ

母は賤なり たから もとめ 追ひつ

得たことも う やげれ 長考 まがまが 心たらは

。

うらがふ う も 賤 たから のまに 人知れぬ

食 かたぬ の慾 おほい 心

(無憂草より)

送金通知

送金五千円。

これは思ひかけない収入があつてお前と次郎と  
三郎と末ちゃんとは父さんの分ける金です。  
お前の家でも年々足りなくなつては父さんもよく  
承知 しりぞ しておます。父さんはほかの年俵 てつたひ の  
ぶんからお前の新作 しんさく を助ける代りとして  
これを送ります。

送金通知

高い。  
 ぶりの金を預けたら毎年三厘の田ほどの餘  
 裕がたまふせうこれでお前の農家の  
 経済と補つて行くことにして下さい。  
 これはたゞ金で父さんから貰つたと考へ  
 ずに父さんがお前と一緒に働いておる  
 一と考へて下さい。くれぐれもこの金をお前  
 の農家に送る父さんの心を忘れず  
 下さい。  
 朱印はつぐれ次郎が帰るおの日に。  
 (島崎長村)

挿入字  
 これからの新書簡

手紙之友社編

年賀の部

作文上の注意

年賀状は古來より我國に傳はる一つの美風であつて、誠に意義ある風習であ  
 るけれども、時代の變遷は年賀状までにも影響して、近頃では昔風の儀式はつ  
 たものが次第に廢れて、極く簡単な賀辭で行はれる様になり、封書で行はれた

ものも、到頭はがきに代り、出す方も受ける方も、通り一片の義理と、何の注  
意も拂はぬ、無意味なものと變はつて了つたのである。

それで何か良い工夫は無いものかと、色々の新しい試みが追々盛んになつて  
来たが、何と云つても年賀状は、一時に澤山出すものであるから、普通の手紙  
の様に委曲を盡して書く事が出来ない、けれども賀状である以上、相當敬意を  
失はぬもので、簡明の中に真情の流露を望むのは尤のことである。

理想に全く適つたものは却々出来難いものであるが、成る可く簡にして要を  
得、相當敬意を拂ひ、簡に失し禮を缺くやうなもので無い事を心懸ければなら  
ぬ。

年賀状

一般の年賀状

明けて目出度き新年の旭を浴し、昨年中の御高庇を心から感謝致します。ど  
うか本年も相變らず御眷顧を賜はります様、偏へに御願ひいたします。

(二)

謹みて新年の御慶申上候、舊年中は何かと御高庇を蒙り、御禮は筆紙に盡  
し難く候、何卒本年も相變らず御眷愛を賜はり度偏へに願上げ奉り候。

友人に

交りを結んでから三年目の元旦を迎へるにあたり、君の爲めにも、僕のため  
にも、ごうかい、事が澤山あるやうにと衷心希望して居る。昨年は何かにつけ  
て、君の友情にのみすがつて、非常な御迷惑をかけて了つた。今年は新らしい

意氣と、充實した計畫の下に大いに働き度いと思つて居る。君も既定の計畫に一層奮闘あらん事を祈る。

長上に

新春の御慶めでたく申納め候。

昨年中は何かと御同情賜はり、忝く御禮申上候。御全家御揃ひにて目出度御重歳遊ばされ候段、實以てつ欣喜の至りに存じ奉り候。小生もお蔭を以て大過なく昨一年を送り、麗かなる旭陽を拜するを得、衷心感謝の至りに堪へず候。尙本年は一層精勤致し御厚情に報ひ奉る覺悟に御座候。何卒此上ながら何分の御指導賜はり度御願申上候。終りに臨み貴家御一統様の御清福と御健康とを祈り上げ奉り候。恐惶謹言。

郷友に

新玉は屠蘇一杯の御慶かな

屠蘇に酔ふもよし、酔はぬもよし、何れにしても心からなる更革と刷新されたる、意義と價値とで蘇らねば屠蘇一杯の御慶かなとは云はれまい。お互に此の意氣で麗かなる新年の旭の光りを浴びやうではないか。

年賀状の返事

(一) 一般の場合

新春早々賀状を賜り奉拜謝度、新陽を迎へて貴家御一同の御萬福を奉祈度、尙本年も相變らず御眷顧願上候。先づは取敢ず御答禮まで。敬具。

(二) 友人に

君神は一切平等だ、好く言へば仙陽、悪く言へば山間の僻村である僕の里へも新年が来た。

新らしき年を迎へて村人は、神心共に清く、聖き平和の空気が無限に充滿して居る。僻村で銘酒も無く見る物もない。併し、なた豆煙管で、掌に「すひがら」を拂ひ落しながら手織の木綿で「お目出度う御さえます」とやられると、何んだか本當に目出度い様な気分がする。

君も恙なく越年の報に接し僕は嬉しい、僕も事無く下宿屋の三疊で、龜の正月をして居る。お互に年が一つ多くなつて恥かしいが壯健なのが何より目出度い。

婚姻を祝ふ手紙

承れ此ばの度は、御子息様、住吉氏の令嬢松子殿と御婚約が整つて、近日華燭の典を御擧げなさるとのこと、大慶の至りに存じ上げます。松子嬢は御容姿といひ御才藻といひ、女學院出身中でも譽の高い御方、妻も一二度御目にかつた事があるとか申して、御人柄や御氣立をおほめ申上て居ります。御令息には此の上もない御好配幾久しく御祝ひ申上げます。萬年畫伯鳳鸞の對幅聊か御祝の記念に進呈いたします。御受け下さらば幸甚に存じます。(書翰文講話及文範)

【作例】老鶯聲を收めて將に櫻花爛熳の時に當り豫ての風評事實となり、林子嬢と近々上野精養軒に於て成婚式舉行の由御報知に預り美望の念に不堪候。

○過ぐる幾日の夜、御婚儀目出度相濟されたるよし、千鶴萬龜の至りに御座候。



○見渡す限り花の筵の世の中と相成り申候處、御令嬢様には此度御良縁とのはせられ来る×日の吉日を以て目出度華燭の典を擧げられ候由。

○加藤精吉氏御令息と御婚儀が滞りなくお済みになつたと云ふが、こんな御目出度の事はなし。

○御吉報うれしく拜見致しました。まことに申分の無い御良縁末長く借老の契を重ねられる様祈りあげます。

同返事

堅き愛の信念は漸く成婚の運びとなりて悦び居り候必ず夫婦相和して共白髪まで添ひ遂げ申す可く、社會のよき夫婦の一組とならん存念に候。

貴論を服膺致し候て萬々相背く様の事有之間敷、國家永遠の福利は小生等夫

婦も幾分與つて増進さるゝものと存じ候に付き、是れより愈々純正なる社會の一員となりて奮闘致さん心算に候。尙今後共及ばざる點は幾重にも御教示に預り度願上候。御多忙の御身ながら當日は是非々々御臨席被下度懇願の次第に候。右御禮を兼ね御挨拶申上候。勿々。

(模範的書翰文)

【作例】 漸く妻を娶る事となつて、城廓を構へる事になりました。早速御懇篤なる御祝詞をいたさしまして有難う御座います。御仰に従ひ、一家主人としての責任をはたす決心です……

○良縁だなどと御ほめにあづかつて赤面の至りです。人間が寄り集つて生活して行く以上、國氏の一人となつて生きて行く以上、家を成すと云ふ事は幾分の責務の履行だらうと思ひまして……

○どうなり妻を娶つて一家を支持する様になつた事は本當に嬉しい事です。御期待に背かぬ様いたしたいものです……

出産を祝す

拜啓 承り候へば御令閨様には御安産遊ばされ候由、事に玉の如き御男子御分  
 娩致され候由御家運御隆盛、誠に目出度次第に候。人生最大の慰安は子の愛育  
 によつて初めて得らるゝものと聞き及び候が常より子供の御好きなりし貴兄の  
 事として、一更の御喜びと御察し申上候。

時下季候變節の折柄に候へば、特に御母子共に健康に御留意の上御攝生大切  
 の程祈り申候。敬具。

【作例】 拜啓 承り候へば姉上様には、去る×日男子御分娩成され候との事、

目出度き極みと御悦び申上候。

○昨夜御令閨様には御安産遊ばされ、御二方とも御壯健の由承り御家門御繁  
 榮の兆と慶賀の至りに存じ奉り候。殊に兼てよりの御希望通り、御男子にて  
 あらせられ候との事御一統様の御喜びさこそ存じ申上候。終りに臨み御二  
 方の幸運を祈り候。先は御祝詞まで。

○拜啓 拜聞するに貴兄は坊ちやんを得られた相で、誠に目出度い。到々君の  
 精力でやつつけたのだね、僕の處は中々そんな兆候もないのでがっかりして  
 居る。充分氣を付けて大切に育てたまへ、兩三日の内に參上改めて御祝ひ  
 申し上げる。

○そのうち赤ちやんの寫眞を送つて呉れ、御令閨にくれぐもよろしく。

○別封は粗品ですが御祝のしるしまでに御贈り致しますどうぞ御二方様とも御大切に、とりあへず書中を以て慶賀の意を表します。

○尙寒さ厳しく候へば、とりわけ御身御大切に成し下被れ度先はとりあへず御祝まで。

同返事

流畅なる君の麗文で、早速と祝詞に接し有難く奉謝候お蔭様にて母子共に其後何の異常もなく日一日と順調に向ひ居り候間幸に御休心被下度候。

漸く日頃の念願達し昨夜男子出産致し小生も第二世を得て満足に候。皆様へ宜敷御傳へ願上度一度御來遊待ち上げ候。

【作例】 男子を生んだと言ふので妻の元氣は大したものだ。皇がよいと自慢

して仕方がない。君はどう思ふ僕の種がよかつたのだね、アハハハハ、一度第二世の顔を見に来て呉れよ。

○早速御祝詞被下有難く御厚禮申上候。只今の處にては母子共に至つて健全に御座候間御喜び被下度、其の内拜趨御挨拶申上候へども。先は書中を以て御答禮申上候。

入學を祝す

高等商業學校入學試験に御合格の御通知をいたさまして欣喜に堪へません君の事ですから、大丈夫だとは安心して居ましたが、應募者が三十二倍と言ふ素晴らしい景況なので、よそながら多少不安にも思つてゐましたが、たつた一回で見事の御成功で何とも御喜びの申様がありません。素より志操、意志堅固

な君の事ですから、萬間違ひは無いでせうが、尙一層の御奮勵によつて、郷黨の期待に背かぬ様、御勉強していただきたいと思ひます。

私も来る年には必ず東上素志の貫徹に努力する覺悟で御座います。どうか前途の責任の益々大なることをお考へになつて、一層御自重して下さい。

【作例】 緑滴る故郷の山で、君の壯圖を送る可く送別の宴を張りて約一年震たなびく花の頃は過ぎて節句の鯉のぼりの立つ頃となりました。昨日の御知らせには、高等農林入學決定との事、矢張り螢雪の御研學の功と存じ御悦び申し上げます。

○選拔試験見事にパス、いよく角帽の身となられたとの事、實に喜んで居ります。

○時下春暖の候。益々御清榮賀し上げ候。

陳れば、御令息三郎様には、中學校入學試験に見事合格遊ばされ候趣き、實に大慶の至りに存じ奉り候。

○御入校の上は尙一層御奮勵下さつて、郷黨の名譽を十分あらはして頂きたいと思ひます……

○尙小生輩の申し上げる迄もなき事に候へども、前途御多望の御令息に候へば、御健康には別して御留意相願ひ度特に御願ひ申上候。

卒業を賀す

拜啓 春暖の候益々御清昌之段奉大賀候。次に小生事お蔭を以て、無事消光罷在候間乍憚御休心被下度候。